

天沼小だより

文責

校長 大里 忠弘



虫とりに興じる子どもたち

決して遊んでいるのではありません。授業、立派な学習です。生活科や理科の授業で、昆虫について学習します。写真は1年生の生活科のワンシーン、虫探しです。



天沼小の敷地内はいつもきれいです。2人の用務員さんが細かなところまで整備してくださっています。ところが今、校舎前には一部草が伸び放題。理科の先生からのお願いで、敢えて草を刈らずにいるのです。そのおかげで、子どもたちはたくさんの昆虫と出会うことができます。3年生の理科でも昆虫探しがあります。この学習が終わったら、用務員さんをお願いして草をきれいに刈り取ってもらいます。



昆虫たちが棲めるように出来るだけ自然に近い環境を保つ空間をビオトープと言います。メダカなどの水棲生物が棲める環境を保った水の流れるビオトープをよく見かけますが、天沼小のこの庭も、期間限定の立派なビオトープです。

私が今の場所へ家を建てたころ、夏の夜は毎晩蛙の声がうるさいほどでした。周囲一面水田でした。今は一帯が宅地となり、蛙の声はなくなってしまいました。玄関先に青大将が蛭局をまいていたのも、獲物が豊富だったからでしょう。今はヘビを見かけることもなくなりました。

夏休みの自由研究に昆虫標本をつくるなど、今や考えられません。パソコンやゲーム機で昆虫採集をする時代ですから。我が子のものを借りてやってみましたが、マウスでの虫取り網の操作が難しく、虫を手にする感触もありません。すぐに飽きました。学習は実物するのが一番です。

タブレットの学習が進んでいますが、パソコンやタブレットは万能ではありません。実物に触れてこそ気づくこと、感じるがあります。

人間関係もその一つです。子どもたちは学校で友だちと直接会うことで、助け合ったり、励ましあったり、ときに傷つけられたり傷つけたりします。人を傷つけてしまったことに気づいたときは、やはり直接相手の目を見てしっかりと謝ります。そんな学習を日々重ねています。これが、デジタルのネット社会になるとどうでしょう。生身の相手が目の前にいないために、過激に辛辣な攻撃となるといった弊害のニュースがあふれています。

虫かごに入れられた虫が、その中で死んでしまうこともあります。大切に世話をしていたペットが亡くなることもあるでしょう。そんな悲しみの体験を重ねるからこそ、人の心が育つのではないのでしょうか。